

# 心の故郷を育むアート

## ～学校アウトリーチ《であーと》16年目の試み

生田 創(長久手市文化の家 館長補佐兼事業係長)

《であーと》とは、「出会う」と「アート」を掛け合わせた造語です。

アートと出会い、アーティストと出会い、新しい発見をした自分と出会う、そんな想いが実現して愛・地球博に沸く2005年6月、フィンランドからラ・テンペスタ室内オーケストラが来日、そのメンバーが中学校を訪れました。翌年は長久手在住のヴァイオリニスト平光真彌さん率いるMens Laが出演、以来毎年さまざまな地元アーティストたちが登場し、現在では長久手市内のすべての小中学校で《であーと》が行われるようになりました。

昨年はコロナ禍の影響で開催できませんでしたが、今年は学校側からオファーがありました。行事の中止や延期、ディスタンス、黙食など、学校現場の切実な想いが伝わってきました。こういうときこそアートの出番です！今年の6～7月にかけて、3組のアーティストたちが中学校3校で《であーと》を行いました。今回は母校の長久手中学校を姉妹で訪れた福本真琴（チェロ）と福本真弓（ピアノ）をご紹介します。

真琴さんは2005年の《であーと》になんと生徒として参加していました。プロの演奏家として母校に帰ってきたのです。「中3のときに文化祭で初めてみんなの前で弾いた曲（エルガー：愛のあいさつ）」、「東京での大学時代、姉妹で二人暮らしをしていたときに一緒に弾いた曲（ショスタコーヴィチ：チェロ・ソナタより）」、「高校生のときに挫折した曲を大学4年生で再挑戦してうまく弾けた成長の喜び（ポッパー：ハンガリー狂詩曲）」、「長久手に戻って初めて開いたコンサートでお客様が涙してくださった曲（リスト：愛の夢）」など、生徒さんたちは二人の半生を音楽とともに追体験しました。「親元を離れ東京で大学時代を過ごし地元に戻って思うことは、小さな街の良さは一人一人輝ける可能性があって、そばで見つめてくれる家族や友人、恩師たちがいてくれること。そんな街に生まれたことを、私たちは心から誇りに思います。」と真弓さんの言葉で締めくくられました。



2005

2021



《であーと》の成果は何でしょう？

関わる方々それぞれの“想い”は千差万別で簡単に数値化することはできません。一人でも多くの生徒さんたちがアーティストたちの生き様に触れることで自分らしさや勇気を見出し、やがて長久手が心の故郷となることを祈りつつ、今後も《であーと》を続けてまいります。